柳田格之進感想

今回は古今亭しんちょうの柳田格之進を聞いた。話の内容だけでなく、話をしているしんちょう自身にも特徴があった。

しんちょうの特徴

彼は枕の部分で昔はあったが、今はないことがたくさんあるという話をした。その後で彼が披露する話もそのような類いである、というのでどんな話かと思わせる。枕を終えて話の中身に入っていくと、しんちょうという人物は後ろに下がって、格之進や万屋の人たちが前に出てきて話が展開していく。ところが最後の方で再びしんちょうが現れて、「ここが今とは違う所」と指摘して笑いをとる。これが一種の落ちになっているのではないか、と私は思った。今期の研究会で鑑賞した話の中で初めてのスタイルであった。

話の特徴

私が特に気に入ったのは番頭の男の様子の変わり用である。50両が行方不明になったとき、彼は格之進を疑った。暗に「お前がくすねたのだろう」と格之進に訴える番頭の意地汚さというか下劣さは好ましくない性格であるが、なかなかに人間らしい一面であると感じた。50両が見つかったと、そんな彼が知った時、首を差し上げるなどと調子に乗っていってしまったことをとても後悔している様子は情けないし、自業自得なのだが、ここも人間臭いと感じた。そして今までよくない性格が次々露になった彼も汚名返上した。自分の失態で主人が斬られそうになった時、あんなに後悔していた彼が出てきて主人を斬らず自分を斬るようにお願いする。本当に主人を慕っているのだと感じる場面であり、ほっこりする。